

2018 年度③

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 平成 30 年度企画展 3

邪馬台国の時代 6

鉄 ―弥生・古墳時代の鉄器―

解説パンフレット

会期 2018 年 12 月 11 日 ～ 2019 年 4 月 14 日

企画展の開催にあたって

古津八幡山遺跡から見つかっている鉄器は 3 点しかありませんが、出土した石器が少ないこと、鉄器用に使われた砥石が多数出土していることから、当時使われていた道具の主体は鉄器だったと考えられます。

今回の企画展は、古津八幡山遺跡と同時代の新潟県内出土の弥生時代から古墳時代前期の鉄器を集成し、紹介します。

また、当時貴重品だった鉄器が新潟県内にどのようにもたらされたのかを解明するために、新潟県糸魚川市の姫川産の翡翠で作られたヒスイ製勾玉、京都丹後地域で多く出土しているガラス玉、柏崎市開運橋遺跡から出土した北部九州系弥生土器などの動きをヒントに、日本海を介した朝鮮半島からの鉄の流通ルートを考えます。

―古津八幡山遺跡の道具―

古津八幡山遺跡からは、これまでの発掘調査で 50 棟以上もの竪穴住居が発見されています。建物に用いた柱材などの材木をどのような道具で伐ったのでしょうか？

縄文時代の大集落を発掘調査すると、何十本もの磨製石斧が出土します。ところが、古津八幡山遺跡からは壊れた磨製石斧が 6 点しか見つかっていません。古津八幡山遺跡は 200 年近く続いた大集落です。もともと磨製石斧を持っていたならば、縄文時代の大集落と同様にたくさんの磨製石斧が出土するはずで、僅か数点の石斧で柱材を伐ったと考えるのは無理があります。弥生時代とはいえ、発掘調査で見つからないのは、もともと磨製石斧を持っていなかったためではないかと考えられます。

当時の主な道具は石器だったのでしょうか？ 鉄器だったのでしょうか？ 古津八幡山遺跡からは鉄剣・鉄鏃と、剣か刀と考えられる鉄製品の 3 点しか鉄器は出土していませんが、鉄器用と考えられる砥石が一定量出土しているので、主な道具は鉄器だったと考えています。

鉄器が出土しない理由としては、

- ① 錆びて腐蝕したために残らなかった。
- ② 石斧は壊れると遺跡内に捨てられそのまま残るが、鉄器はリサイクルされた。
- ③ 鉄器は貴重品だったから集落を廃絶する際に持ち去った。

などの理由が考えられますが、はっきりしません。

古津八幡山遺跡の鉄器は、墓と、焼失住居や古墳の盛土から出土しました。鉄剣は意図的に副葬品として墓に入れたもの、鉄鏃は焼失住居からの出土で建物が火災にあったために持ち出せなかったものでしょう。遺跡によっては鉄器が腐蝕しやすい土質もあるようですが、古津八幡山遺跡では鉄剣が墓から出土していることから、鉄器がほとんど出土しなかった理由としては、上記の②・③が有力だったのではないかと考えています。



―国史跡 古津八幡山遺跡・古津八幡山古墳の鉄製品―

方形周溝墓 (SX1005) 遺跡の東側斜面にある環濠の外側で検出された長軸推定 3.1m、短軸 2.8m の方形周溝墓。谷側を除いて周溝が検出されている。埋葬施設は墳丘のほぼ中央にあり、両端にある小口穴から長さ約 1.6m、幅 0.5m 程度の組合式箱形木棺と考えられる。この墓坑底面付近から、副葬品と考えられる鉄剣とアメリカ式石鏃が 1 点ずつ出土した。鉄剣は湾曲した状態で全長 21.8cm、幅 2.47cm、厚さ 0.83cm を測る。刃関双孔（はまちそうこう）・目釘孔（めくぎあな）が残る。柄部分には鹿角製の装着物の痕跡があり、Y 字形の鹿角装把が付いた「鹿角装鉄剣」と考えられている。布の痕跡があり布で包まれていたと推測される。鉄剣は従来朝鮮半島製と考えられていたが、短剣であること、厚みが薄いことから国産品の可能性が検討されている。鹿角装鉄剣としては最北の出土例である。周溝や周囲から出土した土器は東北系（天王山式系）が主体で後期中頃の所産であり、鉄製武器の副葬としては古い事例と言えよう。



竪穴住居 (SI0804) 遺跡南東側にある一辺約 5 m、平面隅丸方形の竪穴住居。山側の壁面と壁溝、貯蔵穴、4 基の柱穴が検出されている。焼失住居である。土器 1・砥石 1・鉄鏃 1 点が出土している。鉄鏃は有袂単孔で先端と末端部は欠損しており、長さ 3.5cm、幅 1.49cm、厚さ 0.27cm を測る。出土土器から後期終末期と考えられる。

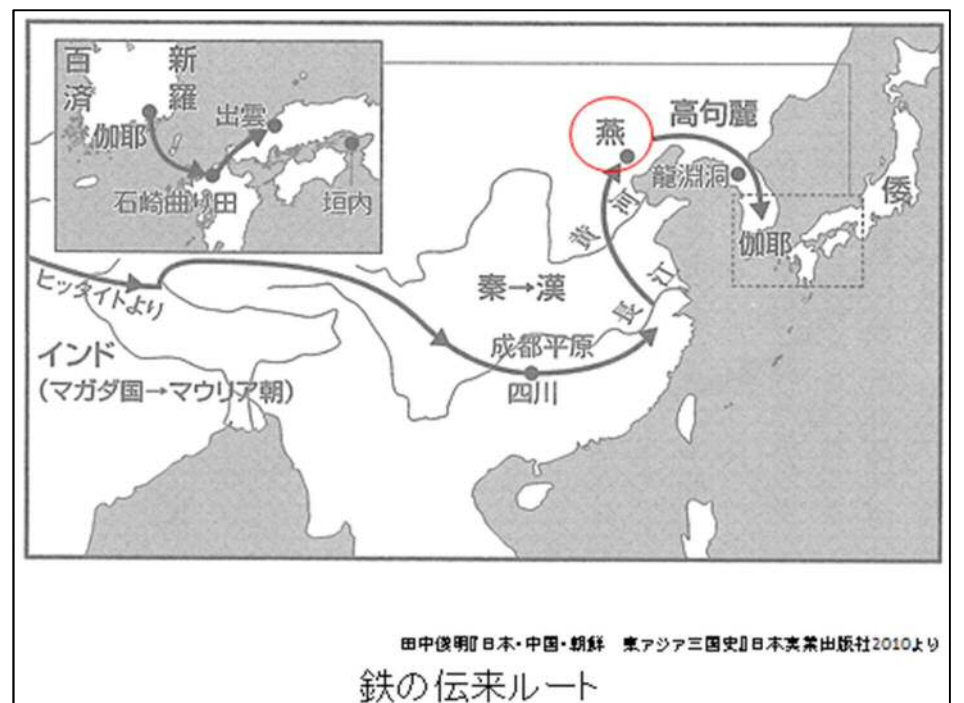


古津八幡山古墳 古津八幡山遺跡の北西側尾根の先端付近に築造されている古墳の盛土の中から鉄製品が見つかった。古墳の規模は約 60m で、二段築成の円墳である。築造時期は出土した土器から古墳時代前期末から中期初頭と考えられている。

この墳丘の断ち割り調査時に、墳丘盛土の中から鉄製品が出土した。盛土の中からは弥生時代の土器も出土しており、これらは古墳築造の際に弥生時代の遺構や包含層を攪乱したことによる混入資料と考えられることから、鉄製品も同様な理由で古墳築造以前の遺物と考えられる。出土した鉄製品は上部・下部ともに欠損した鉄製品で、残存長 7.1cm、最大幅 2.8cm、最大厚 0.7cm を測る。刀子状鉄製品と報告されているが、厚みがあることから刀もしくは剣の可能性はある。



―日本における鉄生産と朝鮮半島との関係―



日本における鉄生産（鉄製錬）は、岡山県総社市千引かなくろ谷遺跡など 6 世紀中頃から後半にならないと行われなかったと考えられ

ています。弥生時代や古墳時代前期の鉄器・鉄素材は、全て大陸からもたらされたものです。

新潟県内では、弥生時代中期の鉄器は発見されていませんが、石川県小松市八日市地方遺跡では舶載袋状鑄造鉄斧の木の柄がたくさん見つかっています。舶載鑄造鉄斧は、中国の戦国時代の終わり頃に「燕」の国で作られたものが朝鮮半島を経由して日本にもたらされたと考えられています。また、その破損品も再加工・再利用されて、日本では様々な利器として使われました。



古津八幡山遺跡にムラがつくられた弥生時代後期になると、『三国志 魏書 烏丸鮮卑東夷伝 第三十 弁辰』に「(弁辰) 国々から鉄を産出する。韓・濊・倭が、みな鉄を取っている。どの市場もみな鉄を用いていて、中国で銭を用いているのと同じである。」と書かれているように、現在の韓国加耶地域で鉄が盛んに作られ、その鉄が日本にももたらされたという記録があります。

新潟県内では、三条市経塚山遺跡から出土した板状鉄斧が重厚な作りで朝鮮半島からの舶載品と考えられています。また、長野県木島平村根塚遺跡の渦巻文装飾付鉄剣は、韓国南東部の金海市・蔚山市・浦項市などから良く似た装飾を持った鉄製品が見つかっています。

一渦巻文様の装飾一

大韓民国 金海良洞里遺跡と渦巻文様装飾

東義大学校博物館によって1990年から1996年にかけて発掘調査が行われた紀元前2世紀末から紀元5世紀にかけての遺跡。特に紀元1～5世紀まで持続的に墳墓が築造された。

加耶の墓制は、土壇木棺墓→土壇木槨墓→竪穴式石槨墓の順に変遷する。それぞれ



の墓制の年代は、土壇木棺墓（1～2世紀初頭）、土壇木槨墓（2世紀後半代に登場）、竪穴式石槨墓（4世紀中葉を始まりとして4世紀後半代）とされており、第162号(銅鏡10点、2世紀後半～3世紀)、第212号（2世紀末～3世紀初頭）、第313号などの土壇(坑)木槨墓から渦巻文様装飾のある遺物が出土している。

甲・剣の把頭・有刺利器・轡などの渦巻文様装飾は巫的性格の強い祭祀長や王のような特殊身分を表していた文様装飾で、三韓時代（原三国時代）の早期加耶の各種儀器遺物や三国時代の加耶の甲・有刺利器などにも象徴的な文様装飾として使用されてきた。

洛東江下流域の加耶社会を発展させてきた首長の系譜が、三韓時代（原三国時代）の狗邪国、早期加耶から三国時代までの金官国、本加耶に至るまで同じであったことを示す資料と考えられている。（朴孝澤「金海良洞里古墳群の調査とその成果」『金海良洞里古墳文化』東義大学校博物館 2000 より）

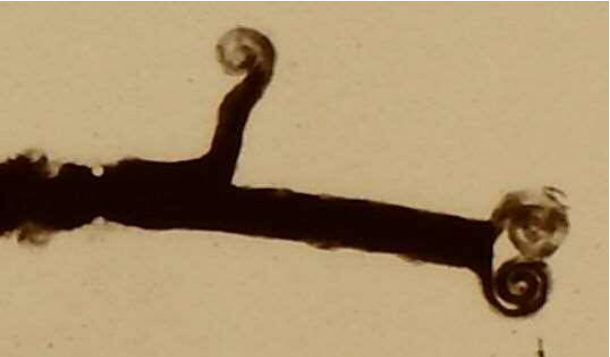
長野県下高井郡木島平村根塚遺跡と渦巻文装飾付鉄剣

遺跡は千曲川右岸の飯山盆地の東南部に位置し、扇状地の扇端部に形成された自然残丘と考えられる緩やかな傾斜の丘陵上に立地する。標高は約330mで周辺との比高は7～10m程度を測る。発掘調査は木島平村教育委員会によって1996年に行われ、1997～2000年にも学術調査が行われ、弥生時代から中世の遺構・遺物が検出された。

検出された遺構は、木棺墓5基、集石墓3基、円形墳丘墓1基、「円形周溝墓と6号木棺墓」、「7号木棺墓と柱穴群」などの墳墓が中心である。遺物は弥生時代後期後半の土器（箱清水式）のほかに鉄剣3点、砥石、ヒスイ製勾玉、碧玉製または鉄石英製管玉、ガラス小玉が出土している。小形土器が多く、北陸系（法仏式）の後期後半の甕と高杯がある。

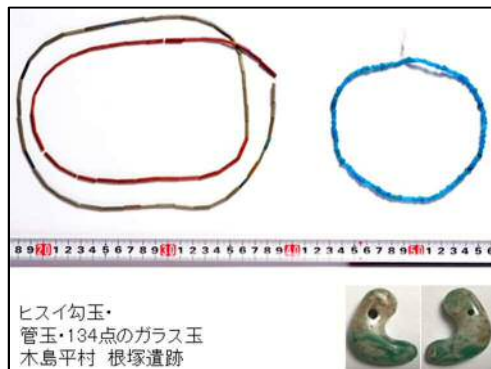
3点の鉄剣のうち、1号剣と2号剣は「7号木棺墓と柱穴群」で出土した。位置は7号木棺墓を三重に囲む柱穴群の地点で、表土下30cm前後の浅いところで確認された。1号剣は長さ56cm、幅3.4cm、厚さ0.8cmを測る。2号剣は長さ74cm、幅3.5cm、厚さ1.0cmで、把の3か所に渦巻文の装飾が付く「渦巻文装飾付鉄剣」とされている。

3号剣は「円形周溝墓と6号木棺墓」より出土した。円形周溝墓は規模が直径6.9mで、周囲には一部が途切



れる周溝がある。埋葬施設の木棺墓は長軸 1.78m、短軸 0.82m を測り、側板溝と小口板溝が検出された。この棺の側板溝内より 3 号剣が出土し、もともとは棺の底に置かれていたものが側板溝に落下したものと考えられている。この他に細形管玉 73 点、ガラス小玉 134 点が棺の底から出土している。この 3 号剣は長さ 47.4cm、幅は剣中央部で 3.3cm、厚さ 0.7cm を測る。鏑をもち断面は菱形を呈する。Y 字形の鹿角装把が付くと考えられている。なお、円形周溝の外側には直径 20cm で川原石の貼石（「根塚弥生墳丘墓」）があるが、6 号木棺墓とは時代が異なるものと考えられる。

なお、2 号剣「渦巻文装飾付鉄剣」に類似する渦巻文装飾（蕨手状装飾）付鉄製品は韓国東南部の金海良洞里古墳群・浦項玉城里古墳群・蔚山下岱遺跡など原三国時代の遺跡から出土しており、大澤正己氏による金属学的調査結果からも舶載品である可能性が高いと考えられる。剣身から柄が直線上とならない形態は鹿角装鉄剣に類似することから、それを模して作られたものであろう。134 点ものガラス小玉・ヒスイ製勾玉共々日本海ルートでもたらされたものと推測される。想像をたくましくすれば、関川河口（裏山遺跡）～妙高（斐太遺跡群）～飯山街道（国道 292 号）などが考えられよう。



ヒスイ勾玉・
管玉・134点のガラス玉
木島平村 根塚遺跡

京都府八幡市ヒル塚古墳と渦巻き飾り付鉄剣状製品

古墳は男山丘陵南端の突出した台地に立地する。標高は約 20m を測る。発掘調査は開発計画に伴い、1989 年に八幡市教育委員会を主体に京都府教育委員会や発掘調査委員会の指導で行われた。調査の結果、古墳時代前期末から中期初頭に造られた古墳と考えられる。

古墳の外形は一辺 52.4m、高さ 7.5m の三段築成の方墳である。墳丘の西側以外は未調査だが、西側では周濠が検出されている。なお、外表には葺石と埴輪列が確認されている。

埋葬施設は墳頂で粘土槨 2 基・円筒棺 1 基、テラスで円筒棺 1 基が確認されている。このうち粘土槨の 2 基の主体部（第 1・2 主体部）と盗掘坑から鉄器が出土した。

第 1 主体部は墓壇の底面に円礫が敷設され、粘土で棺が覆われた粘土槨である。棺は痕跡から推定で長さが 7 m、外径が 80cm の割竹形木棺である。鉄器は棺外の粘土床上から出土し、鉄槍・鉄刀・鉄剣・渦巻き飾り付鉄剣状製品・鉄鏃・鉄製工具類（針）が確認されている。

渦巻き飾り付鉄剣状製品は、刃部 27.9cm、柄部 10.9cm の長さで、柄部に上巻の渦巻き飾りを付ける。渦巻き部は断面四角の錐状の鉄を捩じりゼンマイ状に巻き上げている。



ー日本海ルートを示すものー 北部九州から運ばれた土器

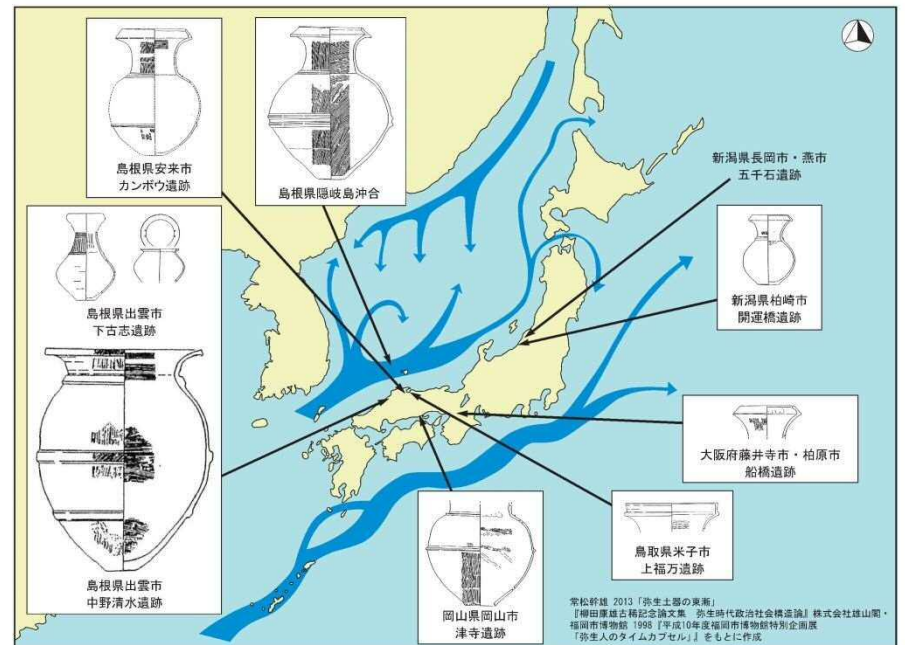
開運橋遺跡 柏崎市橋場町字川向新田

遺跡は JR 越後線西中通駅より 1 km ほど西にあり、鯖石川河口から上流 2 km ほどの河岸に位置する。標高は 0 m である。1955 年に鯖石川の改修工事による開運橋の掛け替え工事の際に川底から弥生時代の壺・蓋、平安時代の須恵器などが採集された。

弥生土器の壺は、ほぼ完形品で器高 21.2cm、



口径は 12.5cm と大きく、袋状口縁で下部に明瞭な稜を持ち、頸部と体部の境に突帯が巡り、底部が凸状となるのが特徴。北部九州の弥生時代後期前半の高三瀝式（たかみずま）式土器の壺の特徴と一致する。砂粒を多く含む土で作られていることも特徴の一つで、器形・胎土ともに県内での模倣品とは考えられないことから、北部九州から運ばれた弥生土器と考えられている。

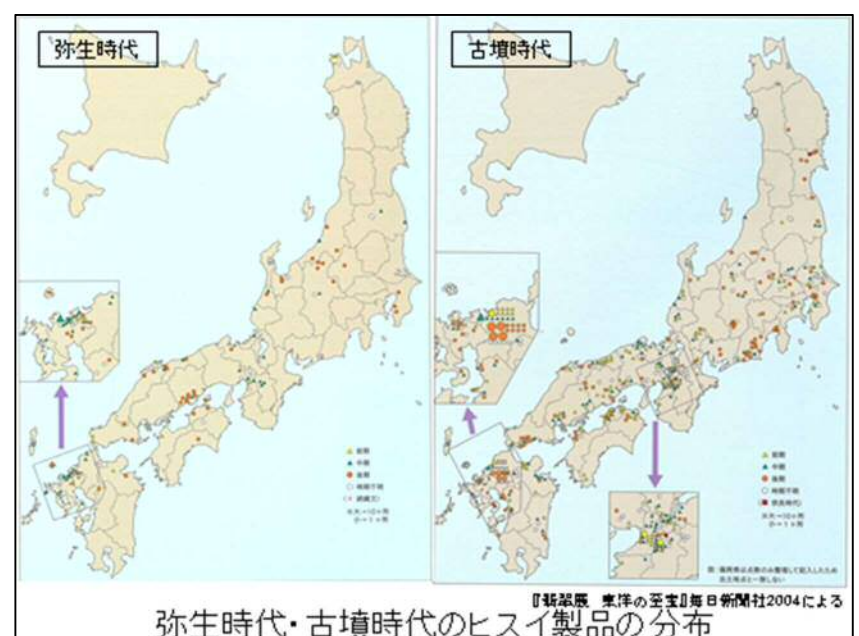


他地域へ運ばれた北部九州の土器

北部九州系の土器は島根県隠岐島沖合からも引き揚げられており、当時の人々が日本海を行き来していたことを示す資料としても貴重である。なお、本遺跡から 1.5km 程北東にある西岩野遺跡から重要な発見が報告されているが、本資料は日本海、鯖石川・別山川を介した他地域との交流を推測させるものである。

ヒスイ玉づくり遺跡の分布と ヒスイ製品の分布

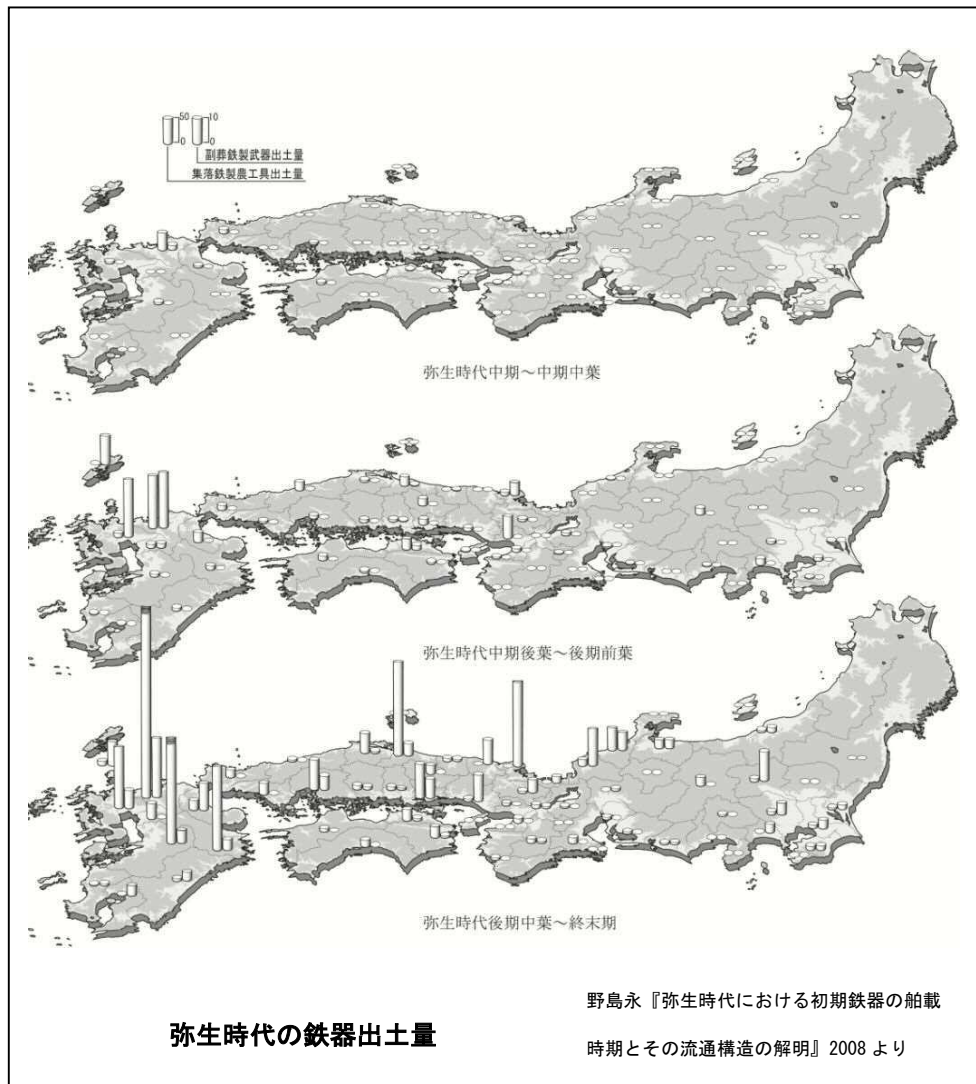
勾玉
柏崎市坪ノ内遺跡



ー日本海ルートと鉄製品ー

弥生時代後期になると、日本海沿岸各地域の首長は貴重財を原料とした手工業生産の管理を行うことによって、経済的な特権を獲得し、潟湖を拠点とした海上交通を通して中国大陆や北部九州をはじめとした日本海沿岸地域との交易に成功した。日本海側では瀬戸内海や近畿地方よりも鉄製武器や工具の出土数が上回る。

交易品 ： 玉製品 ⇔ 鉄製刀剣・ガラス製品



◆企画展で紹介した遺跡（一部）

岩村田遺跡群 北一本柳遺跡Ⅲ 長野県佐久市

遺跡は佐久市の東北部、岩村田台地の南縁に位置する。浅間山南麓の西にのびる台地末端に立地し、標高は700m前後を測る。本発掘調査は佐久市教育委員会によって2006・2008年に行われた。調査により弥生時代・古墳時代・中世の遺構・遺物が検出された。

弥生時代の遺構は竪穴住居52棟と環濠・溝・土坑などが検出されており、環濠集落が営まれていたと考えられる。集落を取り囲む環濠は重複があることから一時期のものではないことが確認されている。出土している遺物は、土器のほかに石器・石製品、玉類、鉄製品などが出土している。鉄製品が出土している住居が、集落の中でも最大規模の竪穴住居2棟であることは興味深い。2棟の住居の時期は弥生時代後期後半（箱清水式期）である。

H33号竪穴住居の北西隅の壁中からは板状鉄斧2点が重なって出土している。何らかの祭祀行為に関わるものであろう。2点の鉄斧の長さは18.6cmと13.2cmと異なるが、幅(4.6cm)・厚さ(1.0cm)は全く同じである。朝鮮半島からの舶載品と考えて良いであろう。また、H51号竪穴住居では、残存長10.8cm、刃幅2.2cm、厚さ0.7cmの鉄剣が出土している。いずれも日本海ルートでもたらされたものと考えられる。



裏山遺跡 上越市岩木字裏山ほか

遺跡は高田平野西側の丘陵上に立地し、標高は最高点で92m、周辺との比高は約70mを測る。海岸までは直線距離で約3kmである。本発掘調査は新潟県教育委員会によって1995～1997年に行われた。丘陵頂部の東西80m、南北30m、面積2,200㎡程の範囲に展開する弥生時代後期後半の高地性環濠集落である。



弥生時代の遺構は、竪穴住居8棟、土坑12基などが丘陵頂部の北側を中心に検出され、北・東・南側の丘陵急斜面からは環濠3条が確認された。

竪穴住居は平面形隅丸方形で4本支柱穴、隅丸長方形で柱穴の無いものなどがある。焼失あるいは土の投入以外の要因で、かつ炉以外で床面の橙化や焼土の認められる1～4号竪穴住居は、鍛冶炉が存在した可能性が考えられている。

遺物は土器のほかに鉄製品や、磨製石斧・環状石斧・石鏃・砥石・軽石などの石器、勾玉・管玉の玉作関連資料などがある。土器は北陸系（法仏式後半）を主体に、信州系・近江系が少量見られる。方形鍬鋤先6点、鉄鏃3点など11点もの鉄製品や多量の砥石の出土量は北陸でも際立って多い。



下馬場遺跡 上越市下馬場字浦山ほか

遺跡は、高田平野西側の丘陵からのびる台地上の標高70～78mに立地する。沖積面との比高は約40m。本発掘調査は新潟県教育委員会によって1997年に行われた。弥生時代後期後半の高地性集落である。なお調査範囲から環濠は確認されていない。



竪穴住居14棟、土坑16基などの遺構が見つかった。竪穴住居の構造は、隅丸方形で4基の柱穴、隅丸長方形で2基の柱穴、円形で環状の柱穴など様々なものが見られた。

遺物は弥生土器・玉作関連資料・鉄製品などがある。土器は北陸系（法仏式）が主体。続縄文式土器（後北C1式～C2・D式）が数点あり、黒曜石製の石偶と共に北海道や東北北部など北方との交流を窺わせる。玉作関連資料は鉄石英と緑色凝灰岩の管玉製作工程品（鉄石英が9割以上）や、玉の穿孔に使用された可能性のある針状鉄製品が出土している。また、鉄鏃・板状鉄製品などの鉄製品や有溝砥石、さらには複数の焼土面をもつ竪穴住居（2・3・9～11・13号）の存在から、集落内で金属加工を行っていた可能性も考えられている。なお、炭化米も出土していることから周辺で稲作を行っていたことが想定されている。

経塚山遺跡 三条市如法寺

遺跡は東山丘陵上に位置し、標高は72mである。通称「経塚山」と呼ばれる場所で、平野部との比高は58mを測る。発掘調査は、水道用水供給事業に伴い三条市教育委員会によって1989年に行われた。弥生時代後期の高地性環濠集落である。

遺構は、断面がV字形の環濠が2か所で確認され、ほかには竪穴住居3棟、溝3条が確認されている。環濠の規模は大きいほうで幅2.25m、深さ1.2mを測る。竪穴住居はいずれも調査区の端部分で検出されたため全体の形は不明であるが、平面形は隅丸方形と考えられる。比較的全容が判明した2号住居は、東側が調査区外であるが長軸が4.7mを測る。住居の内側には壁溝がめぐり、ピット2基と貯蔵穴、焼土が2か所で検出された。



遺物には遺構の内外から出土した土器と板状鉄斧がある。土器は北陸系の法仏式を主体とするが、高杯・器台・鉢など精良なものが目立ち、北陸南西部から移住した集団による可能性がある。また、長野系（箱清水式）・東北系（屋敷式）が数点ずつ見つかり、3系統の併行関係を示している。板状鉄斧は3号住居から出土したもので、重厚で厚みがあることから、朝鮮半島からの舶載品と考えられる。

国史跡 斐太遺跡 妙高市宮内・雪森・神宮寺ほか

遺跡は高田平野西側の丘陵の低丘陵の先端部に立地する。標高80m前後を中心に、約60～145mにかけて広がり、周辺の沖積面との比高差は40mを超える。長野への交通の要衝に位置している。遺跡は、南北800m程の丘陵上に谷や環濠によって区画された百両山、上ノ平、矢代山A・B・C地区の5つの居住域に分かれている。

発掘調査は1926年に行われ、1955年からは東京大学が4年間調査を行った。その後、2001～2003年には旧新井市教育委員会により確認調査が行われたが、調査面積比率が少なく全容の把握が難しい。居住域の面積が50,000㎡以上の、弥生時代後期後半から終末期の東日本最大規模の高地性環濠集落である。

遺構は環濠・竪穴住居・土坑墓などがある。環濠は地区毎で区画の仕方が異なり、百両山地区では丘陵両長辺、上ノ平地区は居住区を取り囲むように、矢代山A・B地区は東側だけに環濠を構築する。矢代山B地区では二重環濠が確認されたが、外環濠→内環濠と時期差があるので当初は二重環濠ではなかったと考えられている。断面形はV字状で、規模は内環濠が幅約6.2m、深さ約2m、外環濠が幅約3.8m、深さ約1.5mである。

竪穴住居は窪みとして今でも残り、その痕跡は130か所を超えている。これに完全に埋没しているとみられる遺構を含めると200か所以上と想定されている。発掘調査された竪穴住居は9棟で、全容が判明しているのを見ると、平面形は隅丸方形を呈するが内部構造は4基の柱穴、2基の柱穴、柱穴の無いものと様々である。

土坑墓は矢代山B地区で3基あり（SK9・23・24）、いずれも長軸約2.0m、短軸約1.0mの長方形で、深さ0.5mの定形化したものである。このうちSK9とSK23から鉄鏃が1点ずつ出土した。2点とも外形が直線的な定角式というもので、鏃身長が約2.5cm、鏃身幅1.1cm、刃部0.8cmと規格がほぼ一致する。なお、SK9からは長野系（箱清水式）の壺が出土した。また、矢代山C地区では土坑墓群や墳丘墓が確認されている。



遺物は土器のほかに鉄製品・石製品・ヒスイ製勾玉未完成品などがある。土器は後期後半から終末の北陸系を主体とし、長野系・東海系の外来系が一定量出土しているが、東北系は確認されていない。鉄製品は土坑墓出土の鉄鏃など少ないが、鉄器用の砥石・軽石製品

がみつかり、鉄器化が進んでいたことがわかる。なお、東京大学調査でも竪穴住居などから「刀子」・「釘片」・「刀子残欠」・「鉄片」の4点の鉄製品の出土の記載がある。

奈良崎遺跡 長岡市島崎字奈良崎・小谷

遺跡は、島崎川左岸の北東方向に延びる尾根上に立地し、標高は最高所で34mを測る。発掘調査は、新潟県教育委員会によって1988年から断続的に7回行われ、2001年・2002年には旧和島村教育委員会によって実施された。調査の結果、弥生時代中期から古墳時代前期、中世を中心とした複合遺跡であることが判明した。



弥生時代の遺構は、竪穴住居数基と周溝墓が3基である。竪穴住居は方形と円形と推測されるものがあるが、内部施設はいずれも不明である。これらの遺構は後期とされる。

鉄器は、弥生時代後期後半の竪穴住居（92SI105）から弧状鉄製品1点、包含層などから弥生時代後期から古墳時代前期の可能性のある刀子1点、鑿？1点、不明鉄製品2点の計5点が出土している。また、中世の塚から「貨泉」が1点出土している。

奈良崎遺跡は大武遺跡・姥ヶ入南遺跡など同一の丘陵上にあるが、島崎川を挟んで対岸の東側丘陵上には松ノ脇遺跡や赤坂遺跡・大平遺跡・上桐神社裏遺跡などが立地している。島崎川流域には弥生時代中期から後期の遺跡や高地性集落や環濠集落などの遺跡が濃密に分布しており、南側の別山川流域と共に極めて注目される地域である。

姥ヶ入南遺跡 長岡市島崎字姥ヶ入

遺跡は、島崎川左岸の丘陵上にある西から東への傾斜地に立地し、標高は約30～50m程度を測る。本発掘調査は、新潟県教育委員会によって1996・1997年に行われた。縄文・弥生時代、古代の複合遺跡である。

弥生時代の遺構は、円形周溝墓1基と溝（SD50）1条である。尾根を断ち切るような溝は断面V字状で、幅2.2m、深さ約1mを測り、環濠と考えられている。周溝墓は遺物の時期から、弥生時代後期から終末期に築造されたと考えられ、環濠も覆土が墳墓周溝覆土と似ることなどから近い時期の遺構とされている。



円形周溝墓は直径約6.6mで、溝で区切られた尾根先端に築造されている。盛土は残っていないが、埋葬施設は検出され、規模は長さ約3m、幅約1.6mを測る。埋葬施設から袋状鉄斧と鉄剣と土器が出土している。袋状鉄斧は袋部の断面形が円形で、合わせの痕跡を殆ど残さないが鍛造品とされている。全長14.4cm、重量807.35gを測る重厚な作りで、朝鮮半島からの舶載品の可能性が高いと考えられている。鉄剣は刃部長36.4cmの大きなもので、茎部を欠損する。当該期では県内最長の鉄剣である。



国史跡 山元遺跡 村上市下助渚字山元

遺跡は越後平野北端の丘陵上に立地し、旧岩船潟の縁辺にあたり、標高は約40mを測る。発掘調査は、新潟県教育委員会によって2005・2006・2008年に、村上市教育委員会によって2009～2011年に行われた。

遺跡は、環濠に囲まれたB地点（居住域）と、谷を挟んだ北側の尾根上に広がるA地点（墓域）に分かれる。B地点では竪穴住居1棟・掘立柱建物1棟や環濠など、A地点では土坑墓18基・埋設土器4基などの遺構が検出されている。



A地点の土坑墓は、平面小判形を呈するものが多く、10基以上が東西方向を主軸としている。1号土坑からはガラス小玉の完形品68点・破損品4点、石鏃5点、筒形銅製品が出土し、土坑上面から剥片類がまとまって出土した。他の土坑は未調査のものが多く詳細は不明であるが、遺構確認面で剥片類がばらまかれたような状態で見ついている。

埋設土器は天王山式の精製小形甕を用いたもの1基、粗製壺を用いたもの3基があり、逆位や甕を用いた合わせ口など形態も様々で、ハケメ調整の天王山式系壺（折衷土器）を用いた埋設土器Bの底面近くからは小形鉄剣が見つかり、副葬品と考えられる。



B地点の環濠は、6か所で途切れ、2か所で重複している。一重が基本であるが、北側は二重、東側は三重になっており、尾根を分断する縦堀が2条ある。途切れる部分が多い点は古津八幡山遺跡と類似するが、環濠の規模は大きい所でも幅約2m、深さが1m程度で、県内の他遺跡と比べても、極めて小規模な環濠である。



竪穴住居は、尾根より若干下がったところで検出され、谷側は流失していたが平面形は小判形で長径6.3m、短径4.5mと推測されており、中央付近に炉が見られる。掘立柱建物は柱穴4基で構成され、長軸3.6m、短軸3.0m・3.36mのややいびつな形である。

出土した土器は、中期後半の秋田系（宇津ノ台式）、会津系（川原町口式）が定量見られるが数は少なく、北陸系（小松式）も目立たない。主体となるものは、後期の東北系（天王山式）で、同期の北陸系・北海道系（続縄文式）土器が若干伴う。

日本海側最北の高地性環濠集落で、東北系土器分布圏内で環濠集落が存在したことを示す重要な遺跡である。遺跡の主要時期は後期中頃で、埋設土器Bの底面から出土した小形鉄剣も当該期のものである。古津八幡山遺跡共々、弥生時代後期の墓に鉄製武器を副葬する古い事例である。70点近くのガラス小玉は丹後地域など日本海側の交流を示す。

堂の前遺跡 村上市下新保字高田

遺跡は三面川左岸に広がる沖積地の微高地上に立地し、標高は15.4～16.0mである。発掘調査は、新潟県教育委員会によって2008年に行われた。

弥生時代の遺構は、竪穴住居1棟、竪穴住居とは認定しがたいとされた性格不明遺構6基、掘立柱建物3棟や溝状遺構、自然流路等がある。



竪穴住居（SI318）は、平

面楕円形で壁溝が巡り、規模は長径5.45m、短径4.53mである。炉跡が中央にあり、支柱穴が3基確認され、土器・砥石・鑿形鉄器等が出土した。

弥生土器は、中期後半の秋田系（宇津ノ台式）、後期の東北系（天王山式）が主体で、北陸系など他系統の土器群は伴わない。外面に刳痕のある土器が1点ある。土器以外には石鏃・石錐・石匙・砥石などの石器、鑿形鉄器、ガラス小玉等が見つかり、

堂の前遺跡は、川辺に営まれた弥生時代中期後半～後期にかけての集落遺跡であり、特に県北部の平野部で弥生時代の竪穴住居が検出されたことで注目される。鑿と考えられる棒状鉄製品は断面長方形で全長13.5cmを測る。出土遺物が少なく中期後半か後期かは判然としないが、恐らく後期前半以降であろう。

五千石遺跡 長岡市寺泊敦ヶ曾根、燕市五千石

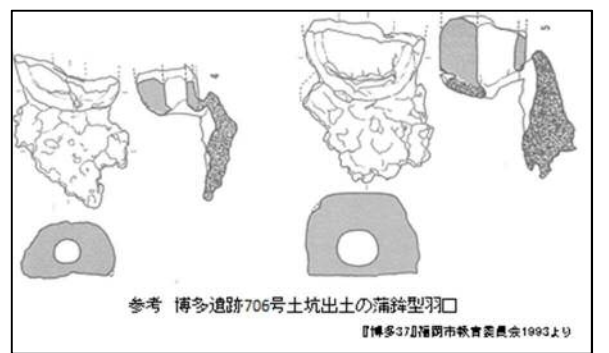
遺跡は信濃川左岸に近い標高約12mの微高地上に立地する。本発掘調査は、長岡市教育委員会によって2006～2008年に、燕市教育委員会によって2006・2007年に行われた。鍛冶関連遺構は南東から北西方向にのびる微高地上（3区）で見つかった。古墳時代前期後半（4世紀中葉から後葉）のもので、明確なものとしては県内最古の事例である。



鍛冶工房の機能をもつ竪穴住居（SI03）は長軸4.86m、短軸4.72mの隅丸方形で、2本の柱穴、3基の炉、壁溝、溝などの付属施設をもつ。住居中央に鍛冶炉があり、長軸25cm、短軸21cm、深さ3cmを測る。炉壁の一部が残り、炉底には椀形鍛冶滓片が残っていた。この炉から80cmほど離れた位置で金床石が見つかり、また、SI03では管玉・勾玉製作工程資料なども出土しており、玉作工房も兼ねていたことが判明した。



炉壁・羽口・椀形鍛冶滓・粒状滓様遺物などがあり、蒲鉾形羽口が多い点や椀形鍛冶滓が全て極小サイズであることからSI03では鍛錬鍛冶のみが行われていたと考えられている。



なお、蒲鉾形鍛冶羽口は、3世紀後半の福岡市博多遺跡群、4世紀前半の奈良県桜井市纏向遺跡、4世紀中頃の兵庫県川西市小戸遺跡などでしか出土しておらず希少である。

古津川遺跡 三条市下保内字割前ほか

遺跡は東山丘陵の裾部から約1kmの沖積地上にある自然堤防上の微高地に立地し、標高は約6mを測る。本発掘調査は2001～2003・2006年に三条市教育委員会によって行われた。古墳時代・平安時代・中世の複合遺跡で、主体は古墳時代前期の遺跡である。

古墳時代の遺構は、竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、平地式住居（周溝を持つ建物も含め）60棟以上、そのほかにも土坑、ピットな



どが検出された。竪穴住居は主体とはならず、周溝をもつ建物と平地式住居によって構成される集落である。

古墳時代の遺物は土器のほかに鉄製品や、土製品、石製品、木製品がある。土器をみると北陸系のほかに、東海系や畿内系など他地域の要素を持つ土器が含まれている。

鉄製品には、平地式住居（SX356）から出土した袋状鉄斧がある。刃部は両刃で、先端は緩やかに弧を描く。この袋部には別の篋状鉄製品が突き刺さるようにして融着している。鑿は土坑（SK322）から出土した完形品で、刃部は両刃、全長 16.5cm を測る。

保内三王山古墳群 三条市上保内字二ツ山

古墳群は東山丘陵尾根上の標高約 40～100mにかけて点在している。調査は、三条市教育委員会・新潟大学考古学研究室によって 1984 年に測量調査、1995・1996 年に発掘調査が行われた。その結果、前期古墳と後期古墳を合わせた計 17 基からなる古墳群であると判明した。発掘調査されたのは 5 基で、このうち 3 基（4・11・1 号墳：築造順）が古墳時代前期に造られた一列の首長墓と位置づけられている。なかでも 11 号墳は埋葬施設の内部まで調査が行われている。

11 号墳は古墳群中最高所に造られた二段築成の造出付円墳である。主軸長は 23m を測り、周囲に部分的な周濠を持ち、南側には陸橋が存在する。なお、葺石は確認されていない。築造時期は墳頂部で見つかった土器などから、古墳時代前期後半頃と考えられる。

埋葬施設は墓坑が墳頂のほぼ中央に掘りこまれている。棺は残っていないが痕跡から長さ 2.93m、幅 0.75m の組合式木棺と考えられ、現在では組合式の分類のなかの長持形木棺との指摘もある。棺内部からは、鉄剣 1・板状鉄斧 1・仿製四獣鏡 1・管玉 67（太形 2・細形 65）・ガラス製丸玉 34 点などの副葬品が発見されている。



山谷古墳 西蒲区福井字山谷

遺跡は角田山南麓から東へ張り出す尾根の先端部に立地する。標高は約 55m を測る。調査は、1982 年に新潟大学考古学研究室により測量が行われ、1983・1987 年に旧巻町教育委員会と新潟大学考古学研究室により発掘調査が行われた。その結果、弥生時代後期の高地性集落が営まれた場所に古墳が築造されていたことが判明した。古墳は、全長 37m、後方部の南側で三段、東側で二段築成を意識したテラスをもつ前方後方墳である。古墳北側には突出部と弧状の外提を伴う人工的な窪地が付帯施設として存在し、古墳東側には少し離れて 2 基の小マウンドが配置されている。築造時期は出土した土器から古墳時代前期中頃と考えられる。なお、古墳に伴う葺石や周濠はない。

埋葬施設は墓坑が後方部墳頂のほぼ中央にあり、棺は残っていないが痕跡から長さ 4.8m、幅は中央部で 1.44m の規模で、近年では刳拔式の舟形木棺との指摘



がある。棺内部から鉄片 2・管玉 7・ガラス玉 34 点が、棺外の墓坑から鉄片 1 点が出土した。これら 3 点の鉄片は同一個体で鑿状の工具になると考えられている。このほか小マウンドから刀子 1 点、袋状鉄斧 1 点、砥石 1 点が見つかった。

正尺 C 遺跡 北区葛塚字正尺

遺跡は旧新井郷川流域の自然堤防上に位置する。標高は約 0.8m で平坦な地形となっている。本発掘調査は、新潟県教育委員会によって 1999・2000 年に行われた。調査の結果、古墳時代と古代の遺構や遺物が検出された。

検出された古墳時代前期の遺構は、竪穴住居 4 棟、掘立柱建物 9 棟、周溝状遺構 2 基、土坑・溝などである。2 基の周溝状遺構のうち 1 基は中央に掘立柱建物があることから住居と考えられる。遺物は土器や石器、土製品、木製品、鉄製品が出土している。土器は北陸系を主体としているが、東海系や畿内系、東北系などが確認されている。

鉄製品は古墳時代前期の竪穴住居（SI144）から出土している。平面形は隅丸方形で拡張された痕跡が残る。主柱穴は 3 基確認されているが 4 基で構成されていたと推定される。一部に貼床が認められるが、炉・焼土は確認されていない。遺構面を 40cm 以上層厚のある II 層が覆っているので、鉄製品は当該期のもので間違いなさであろう。

鉄製品は最大長約 15.4cm、最大幅約 3.3cm、厚さ 0.4cm を測る。長方形の板の上下が折り返されている。見た目以上に重量感がある。



城の山古墳 胎内市大塚

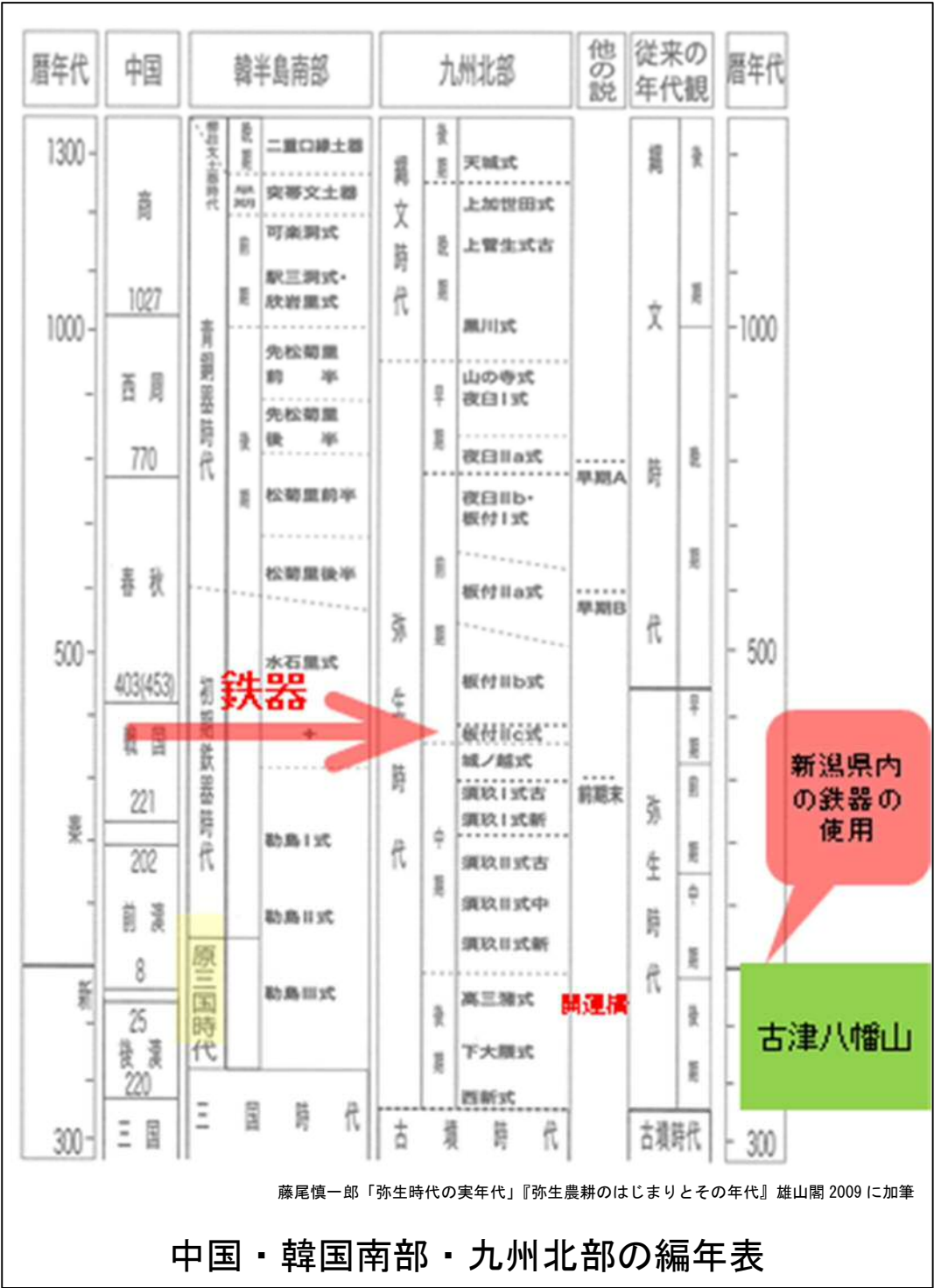
遺跡は、標高約 6m の沖積地上に立地する。1997 年に確認調査と測量調査が行われ、2005 年の調査で古墳と判明し、以後 2015 年まで断続的に調査が行われている。

古墳の規模は 40～50m の楕円形で、高さは 6m を測る。段築のない円墳で、周濠・葺石は確認されていない。埋葬施設は墳頂に 2 か所あり、このうち 1 か所が調査されている。古墳の築造時期は出土した副葬品や土器から古墳時代前期後半頃と考えられる。

調査された埋葬施設は墓坑が掘りこまれ、その中の棺は痕跡から長さ約 8m、幅 1.40～1.65m の刳拔式の舟形木棺であることが判明した。棺内からは大刀 1・剣 1・刀子 1・鉋 1・板状鉄斧 1・袋状鉄斧 1・両頭金具 2 点の鉄製品、盤龍鏡 1 面や銅鏃 7 点の銅製品、翡翠製勾玉や緑色凝灰岩製管玉などの玉類、弓や靫（矢を入れる筒）などの副葬品が出土した。これらの多くは大和政権とのかわりでもたらされたものと考えられており、被葬者がこの地域の有力者であることを示している。

また、棺内からは歯や骨が検出されており、分析結果から被葬者は若年の人物である可能性が指摘されている。





本企画展の開催にあたって、下記の個人・機関等よりご協力いただきました。（各五十音順 所属・敬称略）

穴澤義功 石川日出志 大澤正己 大道和人 加藤 学
齋藤瑞穂 笹澤正史 関 雅之 高野晶文 高橋浩二
豊島直博 中島庄一 朴 天秀 林 大智 久田正弘
古谷 毅 三井田忠明 村上恭通 室 正一

朝霞市教育委員会 石川県埋蔵文化財センター 糸魚川市教育委員会
木島平村教育委員会 小松市教育委員会 佐久市教育委員会
三条市教育委員会 上越市教育委員会 東義大学校博物館
長岡市教育委員会 七尾市教育委員会 新潟県埋蔵文化財調査事業団
妙高市教育委員会 村上市教育委員会 八幡市教育委員会

主催・お問い合わせ先

新潟市文化財センター TEL 025-378-0480
〒950-1122 新潟市西区木場2748-1 FAX 025-378-0484
<http://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/rekishi/maibun>

センター職員による展示解説

日 時 2018 年 12 月 23 日（日）
2019 年 2 月 17 日（日）
2019 年 3 月 17 日（日）
いずれも 13：30～15：30
申込み 不要（直接弥生の丘展示館へお越しください）

関連講演会

演題 「弥生時代の「鉄」がつなぐ日本海沿岸流域の交流」
講師 林 大智 氏（石川県埋蔵文化財センター専門員） **日時** 2019 年 2 月 10 日（日） 13：30～15：30
会場 新潟市文化財センター（展示会場とは異なります）
定員 80 名（申込み不要 直接新潟市文化財センターへお越しください）